

天文普及活動連載シリーズ

天文を届ける仲間たち

【第1回】かつしか天文セミナー

葛飾区郷土と天文の博物館は、地域の歴史を扱う郷土博物館と、プラネタリウム・観測施設を備えた天文博物館の2つの機能を持つた博物館です。平成3年の開館以来、多くの方に天文への関心を高めて頂くために、様々な事業を行なってきましたが、ここではその一つ「かつしか天文セミナー」についてご紹介します。

研究の最前線と一般の人々をつなぐ場として

『かつしか天文セミナー』は、天文学・宇宙開発などの最前線で活躍され



▲ ドーム内で行われたセミナーの様子。参加者皆さんの真剣なまなざし。

ている研究者を講師に招き、最新の成果や話題を解説していただく一般向けの天文講演会シリーズで、これまで13回実施しています。

日本では、天文研究の最前線で行なわれていることが大きくかけ離れていて、プラネタリウムに行くだけでは、天文学の世界で今どのようなことが面白いのか、注目されているのかをなかなか感じる事ができません。そんな中、研究の現場と一般の人々をつなぐ活動の一つが講演会だと思っております。定期的に講演会を行なっている所は少ないようです。

そこで当館では、天文に関心のある方が定期的に学ぶことができる場を目指し、予算的な制約などを乗り越え、現在では2か月に1回程度の頻度で開催を続けています。

講師とのコラボレーションとWEBの活用

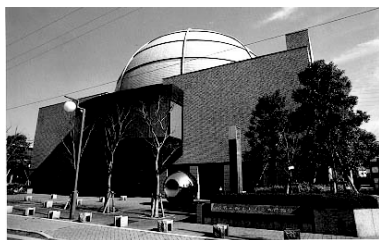
会場はプラネタリウムです。そこで、ただ講師を招いてお話ししていただけでなく、講演の合間にプラネタリウムの放映を挟んだり、解説者との対談形式を取り入れるなどの工夫を行なっています。例えば宇宙研の

吉川真氏から提供されたデータをもとに、小惑星探査機「はやぶさ」が小惑星「253 Mathilde」に到達した時の星空をプラネタリウムでシミュレーションするなど、研究者と博物館職員が共同で作る上げる講演会を目指しています。また、参加者からの質問とその回答、講演内容は当館のホームページに掲載しています。これによって、参加者への事後のフォローができることはもちろん、講演の内容をネット上の共有財産として参加者以外の方にも広く利用して頂くよう考えています。

さらなる天文学の普及を目指して

この事業を行なって感じたことは、日本はやはり文系社会で、科学の講演会と聞いただけで敬遠する人が少なくない、ということでした。私たちは、一人でも多くの方に科学を身近に感じて頂き、その面白さを知って頂くために、これからも様々な工夫を積み重ねながら天文セミナーを始めとした広報普及活動に取り組んでいきたいと考えています。

(葛飾区郷土と天文の博物館 新井達之・根本しおみ)



葛飾区郷土と天文の博物館
東京都葛飾区白鳥3-25-1
電話 03(3838)1101
京成電鉄本線お花茶屋駅より徒歩8分
<http://www.city.katsushika.tokyo.jp/museum/>

「エウロパの海に飛び込め！」
「はいっ！」——宇宙に関するフレーズと元気な掛け声に乗って、星や銀河が勢よく跳ね上がる。もうすぐ、こんな光景が見られるようになるかもしれません。

我々は、『天文学』を身近に感じられるような小物を作ろうと考えています。もちろん、天文台に行けばTシャツやマグカップ、携帯電話のストラップ等のグッズが売られていますが、それらは星や銀河、望遠鏡等といったものが、シンボルとして使われているに過ぎません。

おもしろ計画 第一回「あすとろかるた」

「あすとろかるた」を、カルタに託してみませんか？

びながら勉強するというのもできません。上級者同士で遊ぶなら、解説文の方を読み札として使い、対応する札を取らせるといったルールにしてみても面白いでしょう。アイディア一つで、様々なローカルルールを生み出せる可能性を秘めています。

カルタは、名刺用の紙に印刷できるフォーマットでWeb上で公開し、誰でも自由にダウンロードと利用ができるようになる予定です。完成した際には、是非とも多くの方に遊んでいただきたいと考えています。このカルタに使われる五七五のフレーズは、天プラウェブページ(6面参照)を通じて広く募集されます。あなたの考える「天文五七五」を、カルタに託してみませんか？

「あすとろかるた」を使う遊び方ですが、レベルに応じて様々な形が考えられます。普通のカルタと同じように遊ぶのももちろん、札を取った人に裏の解説文を読み上げさせて、遊



【あすとろ型筒鏡 (astromirror)】
ハワイ島マウナケア山頂には、世界最長の望遠鏡が備わっています。日本の国立天文台が建設した「あすとろ型筒鏡」では、口径8.2mの巨大な鏡で宇宙からやってくるわずかな光を集め、太陽系内の塵塵、遠くで生まれつつある若い星、はるか遠くの銀河や超新星爆発などをとらえ、宇宙の姿を知らがにしようという観測がなされています。



▲ これが「あすとろかるた」。裏面(右)には解説がつく。